

持続可能都市の形成に向けた基礎的研究

—茅ヶ崎市における人的ネットワークとエコツーリズム資源を題材に—

Basic Study on Development of Sustainable City Vision

Human resource network and Ecotourism resources of Chigasaki-city

海津 ゆりえ¹・山田 修嗣²

Yurie Kaizu

Shuji Yamada

Abstract

The role of local university such as Bunkyo University is to play as think tank for local area development, such as Chigasaki city for us. The process of consulting of regional development, from both side of social aspect and tourism aspect, should be 1: knowledge of local resources, 2: establish human resources network, 3: discussion and advice, basically. This study note focuses on 1: local resources of Chigasaki-city from 6 category (Nature, Industry, Food, Tourism history, Activity of citizens on ecology), 2: Resources development procedure through Accreditation Test called “Chigasaki Marukajiri Kentei”, as a project of Japan Foundation. This note shows ongoing study of Kaizu and Yamada seminar.

はじめに —本研究ノートの位置づけ

本研究の背景は、2つある。ひとつは、本学が所在する茅ヶ崎市について、どれほどのことをわれわれは知っているのだろうかという素朴な疑問である。茅ヶ崎の名称を聞いたことがある人々の場合、共通イメージは「海」「湘南」などのキーワードから連想される風景であろう。サザンオールスターズと結びつけて連想されることも多い。地方出身者が多い本学国際学部新入生に対して、茅ヶ崎のイメージについて尋ねたところ、大半の学生が茅ヶ崎＝海と理解しており、通学して初めて実体とイメージの差異に気づいたと述べた。関東ローマ層のために砂が黒い湘南海岸に、失望を抱いていた学生も少なくなかった。今日の大学には、地域のシンクタンクとしての機能がこれまで以上に期待されている。知見の提供とともに、学生や教員には、いわゆる「ヨソ者」として地域の発展のために提言を行う提案機能が期待されていると言えるだ

ろう。大学がこのような機能を果たすためには、地域との多面的な関わりを通して、①地域資源の把握、②人的ネットワークの把握、③知見に基づく提案・提言、というプロセスを実体化することが求められるはずである。そのためには、まず地域を知ることは基本である。山田は地域社会のしくみから、海津はエコツーリズムへの展開可能性から、茅ヶ崎の研究を始めた。

もうひとつの背景は茅ヶ崎のポテンシャルに基づくものである。世界各地の持続可能な都市ビジョンづくりを進めている地域¹を参照すると、環境・地域社会・経済・観光のセクターが相互に連携し、循環しながらひとつの社会システムを構築していることが挙げられる。そこには、基礎となる資源性の豊かさに加え、住民や行政のまちづくりへの意欲が重要な要素となる。茅ヶ崎市にはそのような土壤があるように思われ、大学が参画することで、上記のセクターを結びつけた社会システムが構築できるのではな

1 国際学部国際観光学科

2 国際学部国際理解学科

いかと考えたのである。

本研究ノートは、上記の現状認識にもとづいて筆者らが進めている茅ヶ崎研究の現状報告である。第1章は茅ヶ崎の宝探しと基礎資源の概要（海津）、第2章ではまちづくりと結びついた資源の掘り起こし手法の紹介（山田）をまとめた。海津は観光学（とくにエコツーリズム）、山田は社会学をバックグラウンドとしている。観光学と社会学の共通点と差異について、筆者らは次のようにとらえている。社会学は「まち」内部のしくみやネットワーク構築に関して人的資源間のかかわり方を通してみる分野であり、観光学は「まち」を外に対して発信し、外の視点を地域に取り込むあり方を見る分野である。両者とも「まち」を主体としており、「まち」の活動を通して接続している。

第1章 茅ヶ崎の基礎的資源

1. 調査の目的と手法

まちづくりを前提として行う地域の資源調査は、地域住民の参加を前提として行うことが望ましい。いわゆるワークショップや「あるものさがし」（吉本, 2008）、「宝探し」（海津・真板, 2003）など呼称や方法論はさまざまであるが、基本的スタンスは地域住民と地域との関わりから、価値観も含めた資源の掘り起こしを行うことにある。ワークショップでは特定の目的や目標のもとに意見や情報を引き出していくことが多いのに対し、「あるものさがし」は、現地踏査（町歩き）によるフィールドでの資源抽出方法として熊本県水俣市で開発されたものである。「宝探し」は地域の資源を自然・生活文化・歴史・生業・名人などのテーマに基づき、文献やヒアリング、現地調査など多様な方法で資源を掘り起こしていく方法であり、岩手県二戸市で1991年に開発されたものである。筆者（海津）自身もこの手法の開発に携わった。

本研究においては「宝探し」の手法を採用し、文献およびインターネット調査と若干のヒアリング調査により資源の掘り起こしを行った。使

用した文献は文末リストの通りである。

調査目的として、茅ヶ崎が有する資源を活かしたエコツアーを開発するための基礎的資源調査として設定し、①自然、②生業、③食、④歴史、⑤名人を切り口とした。なおこの調査は2008年度・2009年度ゼミナール3年次の課題としても実施し、「湘南発！テクニカルフォーラム」で報告したものである。

2. 茅ヶ崎市の基礎的資源

(1) 茅ヶ崎市況

茅ヶ崎市は湘南海岸の中央に位置する相模川河口の都市で、面積35.76km²である。茅ヶ崎市は東京圏まで1時間の距離帯にあり、年間を通じて温暖な気候であることなどから、全国的傾向に反して2009年1月1日現在、前年比0.8%プラスの232,805人の人口を有している。市域は茅ヶ崎地区・鶴嶺地区・松林地区・小出地区の4つに区分され、このうち松林地区（高田・天沼など）の人口が最も多い。その背景には交通の利便性が挙げられ、JR東日本の2路線（東海道線・相模線）、新湘南バイパス（茅ヶ崎中央IC、茅ヶ崎西IC、茅ヶ崎海岸IC）、国道2路線（1号線・134号線）等が通る。古くは東海道の街道筋であった。

産業構造は第1次産業1,148人、第2次産業26,892人、第3次産業76,255人と第3次産業に偏り、後述する農業・漁業において特徴を有するにもかかわらず第一次産業従事者は少ない。一方、株式上場企業は5社（第一カッター興業、大村紙業、東邦チタニウム、(株)アルバック、宮田工業（株））あり、商工会議所加盟企業30社と企業活動は活発である。商店街は30あり、それぞれ個性豊かなまちおこしや地域活動への取り組みを行っている。

(2) 自然—地形・地質・動植物

茅ヶ崎市域は地理的な要因から大きく3つのエリアに区分される。

①北部—香川・甘沼・赤羽以北の小出地区で、

藤沢市から続く丘陵地（高座丘陵）である。比較的緩やかな丘陵地を小出川や駒寄川が浸食し、谷戸を作り出している。茅ヶ崎市北部にはかつて九十九谷戸と呼ばれるほど多数の谷戸があったが、現在は多くが開発され、柳谷、清水谷、赤羽根十三箇の谷戸等が残るのみである。文教大学湘南キャンパスは、行谷の源頭部であった。

②中央部—相模川の氾濫原として土砂が堆積してできた沖積低地である。河川に平行して高地のひだができ、その外側に後背湿地が出現し、かつては水田や沼地であったが、現在はほとんど埋め立てられて工業用地や住宅地へと変貌した。

③南部—相模湾の最奥部であり、相模川の河口であることから、南部は海陸両方の土砂が堆積する砂丘地帯であった。かつてはこの砂丘地帯にチガヤ（茅）が群生し、そこから「茅ヶ崎」の地名が生まれたという。

以上のように多様な環境を有する茅ヶ崎市は、動植物相においてもバラエティに富み、水辺・湿地・丘陵・野山・草地等それぞれの環境に合わせた種が生息している。また関東ローム層が12mほど堆積し、それが独特の黒い海浜を現出させている。このような自然を体験できる場として里山公園や市民公園などがある。

加えて茅ヶ崎の海岸は、相模湾の深海底から湧き上がる深海の上昇海流に乗って深海底の魚群も生息している。

（3）自然から生業へ

第一次産業のうち、茅ヶ崎市に特徴的といえるものは漁業と農業であろう。

①農業

農業は、2008年現在約700軒の農業従事者がいるが、50年前と比較すると1500軒ほど減少しており、年齢構成においても37%が70歳以上（2005年現在。茅ヶ崎県農政課統計資料）であり、今後の継続性には課題を抱える。

作物は多品種に亘り、「北部わいわい市」や

「海辺の朝市」など地場野菜を出店できる市があるほか、文教大学エコキャンパス委員会による調査（2007）によれば、地産地消レストランや体験農園、無人直売所などを含め31軒の“地場野菜に出会える”場が設けられている。

②漁業

茅ヶ崎市の漁獲量は、近隣他地域に比べて決して多くない。その中ではシラスの漁獲量が多く、2007年は8.5tと全漁獲量の77%を占めているが、シラス以外の陸揚げはさば類4,000tなどがある程度である。漁業においても観光地引網のプログラムが定着し、風物詩となっている。しかし、近年、砂浜の減少やゴミの増加等によって地引網の存続ができなくなる事態が懸念されている。

（4）生業から食へ

農業・漁業の項で紹介したように、茅ヶ崎市には地産地消型レストランが多数開店しており、とくに茅ヶ崎駅以南に多い。野菜を使ったレストランだけでなく、網元が営業するシラス料理の店などもあり、茅ヶ崎は地場の味を楽しめる町であるといえ、魚介料理を楽しみに遠隔地から訪れる人も珍しくない。都市住民が多いことを反映しているためか、南口付近はパン屋が多いことが明らかとなった。無農薬やアイデアメニューなど工夫がされたパン食材が並び、町の居住やまちあるきの楽しさを提供している。

地場の食材は季節と密接なかわりがあることから、四季を通じて多様なメニューが提供される場となっている。店舗は生産者と消費者が出会い、経済を仲立ちに茅ヶ崎の環境と観光が循環する場としてとらえることもできよう。また、地場産品は環境の変化にも敏感であることから、食を通じた環境教育（食育）の場としても活用することが可能である。

大学近傍の堤にある「浄見寺」は大岡越前の菩提寺であるが、江戸時代の茅ヶ崎は大岡家の石高を支える大切な農地であった。そのことから、茅ヶ崎の生業が生産量・質ともに優れて

いたことがわかる。

(5) 海浜リゾートと茅ヶ崎文化史

①海浜リゾート

茅ヶ崎は、日本の海浜リゾートの誕生と深いかわりを有している。日本に海浜別荘の概念を伝えたのは、明治初期より日本に招聘された「お雇い外国人」の一人、ベルツ博士であった。ベルツは温泉博士として草津温泉の効能を説いたり箱根離宮の適地選定を行った人物であるが、明治12年（1880年）に湘南地方を「自然と気候に恵まれて健康によい」とし、療養・保養地の折り紙をつけた。明治31年（1889）にはベルツの提言を受けてサナトリウム「南湖院」が建てられ、東洋一の結核療養所と呼ばれた。海水浴とともに松林による森林浴が体によいとされ、サナトリウムはそのような場所に建てられた。伊藤博文をはじめとする岩倉遣欧使節団は明治23年に小田原、29年に大磯に「滄浪閣」を構えた。

②別荘開発

明治13年に茅ヶ崎駅が開業すると別荘開発が進んだ。このころの別荘は療養のための海水浴が目的で、医者、学者、政治等が多かった。市川団十郎、川上音二郎等もそうである。また、妾宅も多かった。1950年に湘南電車が開通し、東京まで1時間で行くことができるになると住宅地開発が活発化し、別荘から定住へと変化するとともに人口は増えていった。この当時の湘南・茅ヶ崎の雰囲気伝えるのが小津安二郎の映画である。小津は茅ヶ崎南部にある旅館「茅ヶ崎館」に寄宿して脚本を書いたことでよく知られている。

(6) 環境時代のまちづくり

茅ヶ崎は都市近傍でありながら、自然に恵まれ、かつ農漁業を通じて環境変化を敏感に感じ取ることができるユニークな土地である。また都市住民の移住者が多いことから、都市的感覚が育ちやすく、環境に対する取り組みをする市民団体や活動なども小さいながら数多く展開さ

れている。

①地域通貨

現在、複数の地域通貨への取り組みがさまざまな担い手によって実施されている。

- ・ビーチマネー：湘南なぎさ地域全般での取り組みで、ビーチグラスをお金に見立てる。加盟店で使える。
- ・茅ヶ崎地域通貨Cリング：地域通貨Cリングを配布。加盟店で使える。

②環境保護活動

エコサーファァーの会による海岸清掃や、市民団体による海岸清掃などが行われており、海をシンボルとして環境保護団体が連帯している。また茅ヶ崎野外自然史博物館のように、環境を伝える活動団体も活発に動いている。

③自転車の普及

茅ヶ崎市都市政策課は2004年4月に「茅ヶ崎自転車プラン」をまとめ、自転車のまち茅ヶ崎を目指して活動を開始している。実証実験のほか2009年度は産業振興課によって、自転車を活用したツアーメニューの開発が提案された。

3. 茅ヶ崎の資源の特徴とエコツアーの展開可能性

(1) 茅ヶ崎らしさ

資源からみた茅ヶ崎の特徴は、海と河川がもたらした多様な地理的環境が生んだ、季節変化や動植物、生業の多様性である。その多様性に応じて担い手や産物も異なっているが、とくに農作物は、農家の努力によって多品種かつ美味しい野菜が産出されている。

別荘地であった時代から、著名人や文化人を受け入れてきた歴史があり、今も都市住民の移住が多いのが住民の特徴である。よそ者ではあるが、それだけに茅ヶ崎に愛着をもって来た人材も少なくない。都市のトレンドや流行が入りやすく、小さな市民団体を核として実験的な取り組みも随時行われている。地産地消の店や、環境保護活動など、担い手は多い。次章で紹介する取り組みなどのように、つなぐ役割を生み

出す動きも出てきているが、各個別の動きを横につなぐネットワークが存在しないことが課題とされている。

市全体にのんびりとして、穏やかな雰囲気を有している。

(2) エコツアーへの展開可能性

これらの点在する資源を結んで体験プログラムを作ることが可能である。ダイナミックに展開するものより、小規模な範囲で成り立つ手作り型ツアーに茅ヶ崎の魅力や、茅ヶ崎らしさが活かせると思われる。茅ヶ崎市では、自転車を利用したツアーの事業化の検討を始めている。交通路の問題などをクリアする必要はあるが、内陸部の資源の魅力を伝える移動手段としての可能性は大きい。また徒歩と公共交通を組み合わせる方法も可能であろう。

生産者や活動の担い手など、なるべく多くの市民が参画でき、海だけではなく“もうひとつの茅ヶ崎”として、テーマをもったメニュー開発がふさわしいと思われる。その際、メニューのコンテンツとともに担い手(人材)の開発が重要となる。資源調査の過程で、調査者である本ゼミとの間に、少しずつではあるが人的なつながりが生まれつつある。急がずに進めたいと考えている。

第2章 郷土検定と茅ヶ崎市の地域資源開発

ある地域社会において、地域づくりの源泉となる「地域資源」は、どのように開発(再構築)が可能か。本章では、いわゆる「ご当地検定」の一つと数えられる「郷土検定」のとりくみ(日本財団)をふまえつつ、茅ヶ崎市で郷土検定の企画・整備にとりくむ団体を事例に、将来的な地域資源の開発(再構築)を目指す活動に注目する。そして、地域資源とは何かを示しつつ、それが郷土検定という手段によりしだいに構築されるだろう展開を予測的に描く。さらに、その地域資源が、結果的には地域づくりにつながっている点を紹介する。ただし、本稿は研究ノ

ートという位置づけゆえ、各組織・団体の活動紹介を中心にしつつ、将来的な研究の発展のための土台づくりを目指すものである。

1. 日本財団の郷土検定と各地の事例

(1) 日本財団の郷土検定助成のあらまし

日本財団は、2004年から「地域づくり」にたいする支援を展開している。とくに、「郷土資源と生活の知恵を活用した地域づくり」を意図した、「郷土の活性化を目的とした郷土検定事業の活動資金の助成」や「NPOやボランティア団体に対する活動資金の助成」を実施している。

その背景と経過を同財団のホームページⁱⁱから確認すると、地域資源開発としての特色や、本学国際学部・海津ゼミが進めている「茅ヶ崎学」との接点が浮き彫りにされる。郷土の重要性にかんするキーワードは、郷土に受け継がれてきた「資源」であり、具体的には地元の「自然」とそのもとの「生活」や「文化」、ものを作り出す「技術」、魅力的な「人」、「おもてなし」の心と実践など、郷土(つまり、その地域社会)の活性化に必要な「資源」とは何かの説明されている。

この助成プログラムの骨格は、「郷土学」の発想がいかにされている。再び同財団のホームページからの引用となるが、「郷土学とは、自らの住む地域に受け継がれてきた、ありのままの自然や生活文化、伝統技術などの資源を学びなおし、地域活性化のために活用する取り組みのこと」と記載されている。したがって、郷土学とは、地域社会に「学ぶ」のみの姿勢にとどまらず、人々がその地元の「資源」を「活用」するとりくみ全体を指している。より実践的な「地域資源」の「開発(あるいは再構築)」といえよう。

こうした前提にもとづいて同財団は、2004年度から2008年度までに、全国88カ所の地域での郷土学事業に助成してきた。やがて、「郷土学事業をはじめとする地域活性化が各地で進んで来た」ことを理由に、2009年度からは、「地域の魅力を郷土検定という手法で取りまとめ、地域づ

くりを支援」するプログラムに発展させている。

(2) 郷土検定の目的と趣旨

郷土検定は、ご当地検定の一種とされる。ご当地検定で有名なものに、京都商工会議所が2004年から主催している「京都・観光文化検定」ⁱⁱⁱがある。これは、「京都に関する歴史、文化、産業、暮らしなどの多分野にわたりあなたの京都通度を認定」し、「試験を通じて京都を正しく理解し、京都の魅力を発信すると共に、次世代に語り継いでいくことを目的に実施する検定試験」である。また、西日本新聞^{iv}の2003年10月9日掲載記事によれば、日本文化普及交流機構^vが「博多っ子検定」をおこなっている。同記事は、「インターネットで「博多」に関する知識の広さを測る検定」と紹介し、「歴史・音楽・博多言葉・食・アジアとの交流」や「博多山笠・博多町人・スポーツ・文学・地理など」から出題されると説明している。さらに、日本文化普及交流協会によれば、同協会が推進する「日本文化検定」をもとに、その「地域版」によって「地域コミュニケーションを円滑にし、地域文化に対する興味・理解を促進させると同時に、教育や地場産業を活性化し、それを通して“人生の生きがい”や“潤いある生活”」を目指す提案がなされている^{vi}。

これらに共通する特徴は、地元（地域社会）への関心を高め、その魅力（特徴）の理解から地域の情報を発信して、次世代へ地域の魅力を継承する点にある。つまり、ご当地検定は、地域資源の掘り起こしとなり、場合によりそれらが「京都」や「博多」のように銘柄化することもあって、その地域の観光資源となったり、地域を支える人材育成につながったりしている。

これにたいして日本財団では、「集落」や「町村」を基本単位とし、「市民主導型」で形作られ、地域を学び、地域の活性化を目指す検定を「郷土検定」と呼んでいる。そして、検定を企画・運営する市民団体にたいして、助成事業を展開している。郷土検定では、「検定の実施」が「一つのゴール」とされる。すなわち、「地域資源の

調査」や「テキスト作り」といった準備段階から、第1回検定の実施までが主要な過程であり、実施主体の最初の目標となる。他方で、つくりあげた検定を継続することも重要であり、実施する地域にも利点がある。たとえば、同財団は、「体験講座の開催」といったワークショップ形態の導入に代表される、検定実施上の工夫を重ねていくことが必要と説く。これにより、「幅広い年齢層」の参加につながるような配慮、「さまざまな分野」の「地域団体」が関与する機会、結果的に多様な「主体」による「地域づくり」のための可能性を提供するからである。本稿が地域検定に注目する理由もここにある。つまり、検定作成過程と検定実施・運用過程のそれぞれに、地域資源を開発（再構築）するチャンスがあると考えられる。とりわけ、地域社会の人間関係が整理されて再構築され、検定にもとづくネットワーク化が進展する可能性は、自然的・物理的資源とならぶ重要なポイントといえる。

(3) 郷土検定による地域づくりの可能性

では、郷土検定の導入・実施により、地域にはどのような可能性がもたらされるか。

まず、日本財団の説明する「郷土検定の3つのステップ」^{vii}を見てみよう。検定の実施までには、①郷土独自の魅力調査、②テキスト作りや講習会の実施、③検定の実施の3段階が必要とされる。第1段階の調査では、検定作成のために情報収集が進められるが、ここで「世代間交流」（すなわち世代をこえた会話）が促進される。第2段階では、検定テキストの作成のために魅力が整理され、参加者にたいする講習会もネットワーク作りに効果を発揮するだろう。第3段階でも、継続実施のために検定の工夫が組み込まれ、検定の改良のための協力関係が維持される可能性がある。

このように、それぞれの検定推進主体の「説明」を再解釈すると、郷土検定の利点が浮かび上がる。つまり、郷土検定にもとづく地域の再構築とは、人々の地域にたいする関与を規定し

直し、その発信とともに絶え間ない再構成をおこなうことと要約されよう。したがって、郷土検定は結果的に、人々が地域をいかにとらえるか、地域をどのように作り直すか、その地域とどのようにかかわるかといった問いに、地域の人々が答える作業であると思われる。郷土検定とはそもそも手段であり、検定という手段をもちいることにより成立する人々の活動とその結果（成果）が本旨といえよう。それゆえ、この社会活動は、人々が地域社会とのかかわり方を再設定すること、人々の地域にかかわる目標を明確に定めること、ある場合には地域の資源を使いこなすこと、地域とともに生きる（暮らす）選択をすること、そして、その地域の活動内容を発信することといえるだろう。

ここから、日本財団が述べるとおり^{viii}、「へき地にありながらたくさんの集客がある野外活動」、「情報の受発信にITを活用し村総出で行う民泊」、「エコツーリズム手法を取り入れ村にも環境にも優しいビジネスモデル」などが地域の特徴とともに生み出される結果となる。これらいずれも、地域を使いこなすとりくみを経て、その魅力が地域外に伝達されることにより、人々を引きつける地域に変容することが示される。いずれも、「地域に根付いた資源」を活用する点が共通している。

2. 茅ヶ崎市における郷土検定のとりくみ

(1) 茅ヶ崎トラストチーム

こうした経過を受け、茅ヶ崎市では2009年度より、茅ヶ崎版郷土検定（策定）の取り組みが始まっている。市内浜須賀地区を中心に、市民共育活動を実践・推進してきた「茅ヶ崎トラストチーム」（略称：CTT）^{ix}がその主体となっている。ここでは、CTTのこれまでの活動紹介と、CTTが目指す茅ヶ崎版郷土検定の内容を概観しつつ、茅ヶ崎版郷土検定の意義や可能性について検討する。

CTTは、子供（小学生）を持つ保護者（母親）らが、子供を含む「人々」の学びと成長のため

にできること（しくみ）を、活動をしながら検討・構築することを目指して結成された。同代表者の言葉を借りれば、CTTは「知識創造につながる遊び空間を企画・運営」し、「さまざまなパートナーシップ」を構成して、『『持続可能な社会』を将来世代につなぐ仕組みづくりを模索』することを目指しながら、活動を展開しているという。

CTTは、まず、小学生をもつ保護者有志のメンバーにより、結成された。初期の活動は、代表者がPTA会長だったこともあり、「私たちは小学校のトイレ清掃からのスタート」（1997年）だと自身の活動を説明している。やがて、校内全体の改善にも視野を広げ、1999年以降は「校庭の落ち葉の堆肥化」、「ごみの削減」、「いのちの教育」など、子供と保護者に加え小学校の先生もが抱える眼前の諸課題解決に、「母親」の視点から取り組んできた。また、定期的に校庭内で「遊び場」を運営し、誰もがかかわることが可能な「場」の維持をしてきた。これらの実績から、CTTを取り巻く人々の、CTTへの信頼が徐々に醸成されていったわけである。

2004年、「目の前の問題の根っこ（なぜ、問題が起きたか）を理解するために、様々な団体と交流し、視野を広げる活動をはじめました」との宣言にもとづき、団体名をメンバーの子どもたちが通う小学校の名前から、「浜っ子トラストチーム」（HTT）とした。この時期の特徴は、一般の市民であるメンバーの能力や知識だけではなく、幅広い専門家（たとえば、企業、行政、研究機関など）の力を借りて、これをアレンジする形で活動を推進した点にある。

2008年にはHTTからCTTへの名称変更とともに、「さまざまな情報が交流する『場』を構築」するための活動展開にねらいを定めている。『『遊び』や『体験活動』をとおして『まちづくり』に参加』することが近年の方向性である。こうした経緯と結果にもとづき、CTTは現在、日本財団・郷土検定の助成を受けて、検定という手段を活用したまちづくりを進めようとしている。

(2) 加古川合宿

日本財団は、2009年6月、郷土検定の実施主体の交流を意図したワークショップを、兵庫県加古川市にて合宿形式で開催した^x。茅ヶ崎の取り組みを目指すCTTにも、日本財団からこのワークショップへ参加しないかとの打診があり、CTTの代表者と本学学生3名の合計4名が参加をした。このワークショップでは、各地の郷土検定の取り組みを紹介しあう目的と、各地の郷土検定の取り組み事例にかんする情報交換を目的としていた。

その中で、CTTが意図する郷土検定のフレームを、これまでの同会の経過とともに紹介した。とりわけ、郷土検定構築のプログラムに若者(学生)が含まれていることに注目が集まったという。この高評価をもとに、CTTでは茅ヶ崎版郷土検定のとりくみに本格的に着手することになる。

(3) CTT版郷土検定の意図と解釈

茅ヶ崎検定としてCTTがめざす郷土検定のあり方は、ネットワーク型・体験型の郷土検定といえそうである。地域資源としての地域の市民的活動を発掘し、それら活動のつながりを拡充させて、地域全体に活動の編み目を張る。検定の参加者は、これらの単発的な活動にかかわりながら、実はネットワーク型にプログラムされ相互に連携されている茅ヶ崎の地域活動に参加を重ね、地域の人々との交流を深めていく。こうした活動経験を通じて、参加者は茅ヶ崎への理解を高めていくという方法である。

茅ヶ崎の市民活動の実際をさまざまなシンポジウムに参加した経験から判断すると、茅ヶ崎市は市民的活動の原動力である市民の「底力」が強いとの評価がなされる。そして、個別の活動展開もかなり充実しているという。しかし、CTTの判断は、せっきくの地域資源でありながら、これら活動が有効に連携していないという。たとえば、単独型、自立型が主流であり、したがって、ネットワーク化の可能性が低く、活動

資源が組織内に単独に存在している状況になりやすいというのである。そして、それゆえに、活動の広範な流通や連携の機会が少なくなっているのではないかと判断している。

つまり、このCTTの感覚には、いつも「望ましい」方向にむかおうとする市民的な努力が、活動ごとに個別化されているために力の分散が生じ、小さくまとまった展開しか見られないという反省が込められている。そこで、CTTの茅ヶ崎検定の骨格は、市内の諸活動の統合によって、地域の活動を緩やかにまとめようとする試みであり、同時に、こうした方法が、検定方法の新規性として注目されたと判断できるだろう。まちの魅力とは、当然ながら、いきいきとしたまちが構築されることである。そのために、たとえば、客観的な対象物(自然、景観、風景)を社会的に活用することをめざす場合がある。しかし、CTTのとりくみはむしろ、その社会的活用を促すためのネットワークづくりを志向する活動である。つまり、こうした地域の連携構築も、まちの魅力の一部を構成するはずである。ネットワークによる人々の交流の意味は、まちがもつ魅力(資源)にたいしてアクセスすること、まちが持つ魅力の活用実態にたいしてアクセスすること、まちが持つ魅力を活用している人々にアクセスすることであり、いずれも地域の新しい姿を作ることになるだろう。

茅ヶ崎検定の開発は途上であるが、検定をツールとした地域資源の再構成(開発あるいは再開発)の部分に、「ネットワーク型地域資源」の重要性がある。たとえば、文化財に有形・無形の別があるように、地域資源にも有形・無形のものがあるという発想である。CTTはこの無形性にも着目したのであろう。暫定的な分析ながら、この利点を挙げれば次のようになるだろう。

- ①市内の市民的諸活動をネットワーク化することで、組織単体では到達することが難しい達成目標をかかげることができる(組織相互の利点)。
- ②ネットワーク化にもとづき形成される連携が、まち全体の活性化につながり、適切な公益性を

提供する（地域社会の利点）。③これを郷土検定のプログラムにのせることで、諸活動のネットワークや連携の根拠を示し、まちの協力関係のストーリーを獲得する（CTTの説明力を高める利点）。このような柔軟な市民の発送を、研究機関としての大学（研究所）がサポートすることで、市民にとっては活動の拡充が、研究機関にとっては地域社会への貢献が可能ではないか。CTTの茅ヶ崎検定のとりくみにかかわりながら、このようなヒントを得ることができた。

おわりに

以上に、茅ヶ崎市における地域づくりと観光開発の両面において共通の土台となる「資源」と「人材」に焦点を当て、現在学生と進めている掘り起こしの経過を報告した。調査の過程では茅ヶ崎市や市民活動団体の方々にたいへんお世話になった。この場を借りて感謝申し上げる。

【参考文献】

- エコサーファー（2008）『Eco&Surf Magazine@shonan』No.11
- NPOサポートちがさき（2007）『ちがさき市民活動団体ガイドブック』
- 茅ヶ崎市（2004）『ちがさき自転車プラン』
- 茅ヶ崎市（2009）「コミュニティバスえぼし号」パンフレット、茅ヶ崎市
- 茅ヶ崎市（2008）『望ましい環境の保全と創造をめざして 茅ヶ崎市環境基本計画年次報告書』、茅ヶ崎市
- 第4回湘南・谷戸シンポジウム実行委員会（1999）『谷戸はワンダーランド』、第4回湘南・谷戸シンポジウム実行委員会
- 茅ヶ崎市ホームページ
- 文教エコキャンパス委員会（2007）『Chigasakitchen』、文教大学エコキャンパス委員会
- 安島博幸・十代田朗（1991）『日本別荘、茅ヶ崎市史ノート リゾートの原型』、住まいの図書館出版局
- i ウィスラー（カナダ）、ツェルマット（スイス）、ストックホルム（スウェーデン）など。
- ii <http://www.nippon-foundation.or.jp/> より。
- iii 同検定ホームページ <http://www.kyoto-kentei.ne.jp/> より。
- iv 同新聞ホームページ <http://www.nishinippon.co.jp/> より。
- v 同機構ホームページ <http://www.nippon-net.or.jp/> より。
- vi 同上。
- vii 同財団のホームページには、「(1) 郷土独自の魅力調査：フィールド調査、文献調査、専門家へのヒアリングなどを通じ、検定問題のモトを集めます。聞き書きで、お年寄りと子どもの世代間交流も同時に促進できます。(2) テキスト作りや講習会の実施：調査で集めた項目を、分類して、テキストを作ります。テキストづくりにあわせ、調査内容を実際に体験して、楽しく理解を深める講座も効果的です。(3) 検定の実施：大人と子ども、級などでクラスを分けて、みんなが楽しめる工夫が地域に受け入れられるポイント。学校での定期的な開催が行われている地域もあります」と記載されている (<http://www.nippon-foundation.or.jp/>)。
- viii 同財団の前掲ホームページより。
- ix 同団体のホームページ <http://chigasaki-trust-e.net/> より。以下の各情報も同様。
- x 日本財団ホームページより (<http://www.nippon-foundation.or.jp/>)